んどが独立した分類群であることが認識されつつあるという経緯が紹介されており，ミズゴケ属分類に関する総説的な意味あいも担っていると言える．

本書の最後の章には，Turner 博士によるミズゴケそのもの，あるいはミズゴケ類（あるいはスゲ類）が腐ることなく蓄積し形成されたピートの利用法と経済的価値についての総説がある．ミズゴケの抗菌性に注目して，幼児用のマットレスパッドとして，あるいはサニタリー用品の材質として，すでに商品化されていることなどが紹介されており，また別の意味で興味深かった．

多岐に渡るミズゴケ研究の現状を手早く把握する上で，この総説集は便利なものとなろう．またすでにミズゴケ類に興味を持ち，研究の材料として利用してきた人も，この本からその仕事をさらに発展させる上で恩恵をこうむることは間違いないと思う．

（兵庫県立人と自然の博物館系統分類研究部　秋山弘之）

□御影雅幸（編）：**金沢大学薬学部付属薬用植物園所蔵腊葉標本目録≪第一集≫**白山の植物．1995. 182pp. 同園．非売品．

1982年に自然史関係大学所蔵標本総覧が作られたとき，金沢大学薬学部の植物標本数が，同大学理学部のそれよりはるかに多く記録されていて驚いたものである．金沢大理学部は，標本に一連番号をつけている日本では当時数少ない標本室だったので，そちらの方の数字の信頼性は高かった．薬学部がそれをしのぐ標本数を所蔵しているとは，誰も知らないことだったので，推計にせよその実数がどの程度のものか，当時話題にしたことがある．その後私は薬学部の標本を調べさせていただいたことがあるが，床の傾いた一室に茶箱がたくさん積み上げられており，担当の木村久吉先生のご案内がなければ，目的の標本に行き着くのはむずかしかった．ここで地震がきたらどうなるだろうと，心配になったことを記憶している．木村氏が辞められた後の，これら標本の運命にはあまり期待が持てなかった．ところがその後，薬用植物園ではその整理につとめ，標本数は約20万点ということがわかった．これらは主として約40年にわたって勤務された木村氏の集められたものである．標本の大半はすでに台紙に貼られていたので，整理は標本番号をつけ，標本ケースに分類収納するのと平行して，データをコンピュータに入力した．その結果これ迄に約5万点が整理されたという．本目録はその中から白山とその周辺産の標本を抽出したもので，約7000点がリストされている．

配列は裸子・双子・単子・シダでまとめ，その中は科の学名順，科の中は学名順である．目的の植物を見出すために，先頭に科および属の学名の索引と和名の索引がついている．レコードの項目は，学名・科名・和名・採集地・採集年月日・採集者・標本番号・標本についている器官・重複標本数・白山における地域区分である．標本データベースはいまやあちこちで作られており，データの交換によって情報の蓄積をはかる時代になってきた．私は「みんなが同じデータ仕様でやろう」という掛け声には賛成ではないが，これ迄の体験から「こんな風にした方がよい」という意見はあるので，データベースの仕様がこのリストと同じものであるとの前提に立って，感想をのべる．なぜそういう前提を立てたかというと，このリストは約5万件のデータベースから抽出した筈なのに，「白山」を特定するデータがないので，ここには表示されていない項目があるかもしれないと思うからである．

まず一見して，植物名（学名・科名・和名）がレコードの半分以上を占めており，データベースとしてもったいない気がする．日本植物の標本データベースとしては，科・属・種の学名の短縮形と和名，あるいは和名のみにとどめておいて，別に正式の学名和名のシソーラスを用意し，必要なときソフト的に連結して表示する方が便利ではないかと思う．採集者が複数のときは一名の氏名の後に「ら」をつけて省略しているが，これは賢明な処置である．特定の人名がローマ字のままになっているが，他と同様漢字にした方がよい．たぶん漢字綴りを見出す資料がなかったためと思われる．他の項目も同様であるが，日本の標本ラベルは和文欧文がまざっているので，そのまま記録してしまうとソートや検索がやりにくくなる．なおソー

トの便という点からは，採集年月日の月は英字より数字の方が楽だし，項目幅の節約という点からは，ピリオドは省いて差支えないだろう．

器官というのは標本に葉茎根果実のいずれがついているかを示したもので，薬学部としての利用の便宜のためである．こういう項目は親切で有用であるが，データ作りは思いのほか大変だったろう．私もこういう項目を作ったことがあるが，面倒でやりきれなかった．とくに花と実の区別はむずかしい場合が少なくない．項目データとして「*」が用いられているが，これは「実」とか「花」とか，そのものをみれば意味がわかるようにした方がよい．というのは，この表には項目見出しがついているのでよいけれど，他の機器とデータを交換する際には見出しが伴わないことが多いので，レコードだけでは意味がわからなくなることがあるからである．

重複標本数は，同じ標本番号のシートがいくつあるかを示しているが，私は標本番号（シート番号）というものは標本を特定するためにあるもので，重複標本といえども別な標本番号がつけられているべきだと考える．採集番号（フィールド番号）ならば，野帳との対応をとり，重複品であることを示すことが目的なので，同じ番号で当然である．とくに薬学のようにどの標本からサンプルを取ったとか，三枚の内一枚が同定違いだったとかいうことをデータベース上で検出するときに，シートを特定する番号がないととても不便な思いをする．

以上は汎用データベースとしてみたときの感想である．白山の地域区分のような，特定の地域や目的のデータは，それぞれの便宜に応じて記号やコードを使うほかあるまい．いずれにせよ，人手の足りない中を，標本整理やデータベース作りに努力されている皆さんに敬意を表したい．生物多様性だの自然環境保全だのが声高に叫ばれるにもかかわらず，その基盤である標本室というものには相変わらず陽が当たらないようだが，こういう地味な仕事を積み重ねることが，認識を改める一助となるだろう．私のように普通な植物の資料がほしい人間には，薬学部の野外実習の標本は非常に有用なので，続編を期待する．本リストは非売品であるが，内容はフロッピーディスクで利用できるとのことである．希望者は御影氏に連絡することをおすすめする．　（金井弘夫）

□細井幸兵衛：**青森県野生植物目録** 84 pp. 1994. みどり造園有限会社. ￥2,000.

絶滅の危惧が心配される野生植物種が数多い今日，各地の植物目録は分布の記録や実情を知る上で基礎ともなる重要な資料である．これをまとめるには，過去の文献に通じ，野外調査の積み重ねが必要である．しかも概要が判りかけた後も，少しでも完璧を期すために調査を続けたい心境にかられるのが常である．このような植物目録あるいは地方植物誌の必要性は今後ますます高まるに違いないが，誰でもおいそれとできるわけではない．分類学の知識よりも何よりも種を職別する鑑識眼が不可欠である．

1941年に村井三郎が著わした総目録以後，信頼に足る青森県の植物目録は出版されていない．本目録の著者は長年にわたり，各地に調査を続けられた．本目録は県産野生植物として2019種を記録する．種と種内分類群は著者の見解で採用されている．私にとって，レブンイワレンゲなど今後の検討に待つものも若干ある．　（大場秀章）